

我が子らめ

集団生活をめぐって

小 蘭 江 幸 子

U子の場合（小二）

長女のU子は、はりきって二年生に進級したはずだった。ところが、帰宅してもピッタリと学校の話をしなくなり、笑顔の出ない硬い表情でおやつを食べるようになってしまった。

通常はもちあがりて二年生になるのだが、この年にかぎり、四クラスが三クラスに減らされ、三十人だった人数が四十人となり、新しい担任、新しい顔ぶれの級友で始まった二年生だった。

親としては様々に推測してみる。うちとけられる級友がみつからないのか、担任の先生になじめないのか、はたまた毎夕十分のピアノのけいこが心の負担になってしまっているのか……。そうしているうちに、朝食後、腹痛が起こるようになり、登校時間がおくれ気味になってきた。「学校に行きたくない」と、力なく訴える。一応、教育委員会から配られている不登校のパンフレットのマニュアルどおりに、私もやってみた。夕食の用意にU子と共に包丁

を使いながら、

「どうして学校に行きたくなかったのかな」

「お母さんには、言いたくない……」

「言ってもらわないと助けてあげられないんだがなあ。どの時間が一番つらい時間なの？」

「給食の時と、朝と、休み時間と……」

「授業の時は、大丈夫らしいね。あとはひとりぽツンとしてさびしいのかな」

「そうじゃなくてね」と言いながら、U子はもう泣きじゃくっている。彼女にとってそんなに大変なことだったのかと私も胸をつかれる思いがした。

「前の席のAさんがひどいことを言うの、悲しくて苦しくて、もう我慢できない」

「たとえば、どんなふうに？」

「自分だけすましていい気になってる、とか、そんな上ばきをはいていいと思ってるの、とか……」（U子は前年度の旧式の上ばきを使っていた）U子によれば、一月に二、三回、そのようなことが前の席

から発せられるという。一週間すると席替えがあるので、それまで学校を休みたとも言った。母も同じ体験があること、思いきってけんかしてもよいこと、あと一週間と思えば、がんばる力も湧いてくる等話してみた。

ところが次の朝、U子は、玄関を出ようとすると吐気がこみ上げて、とうとう登校できなかつた。U子が、心も体も登校できなくなってしまったということが、暢気な私にもようやく理解できた。そして、ここで無理強いすると、親子関係はおろか、U子の心身を傷めつけるのだということも。

すぐに、担任の先生に会い、登校できない旨を、話すと、原因を質問され、重ねて、

「無理に登校させようとせず、行きたくなるまで待つてやってください」と言われる。席がえの日までU子の出席できる時だけ不定期に出席してよい、送りむかえは親がすることを了解し合った。それで、U子には「一時間目の始まる時間に親が送って

行き、四時間目がおわる時にむかえに行く。家で昼食、五時間目に又送ってあげよう」と提案すると

「それでいい」と言う。居合わせた父親が、早速学校に送って行った。父親はその途上で、仲よしの友だちができると楽になっていくこと、すぐにむずかしければ、別の組の仲よしのところへ避難して休み時間をすごすことなど、具体的な知恵を授けたそう

だ。そうして送りむかえをしていたが、二、三日すると、U子は水痘を患ってしまい、治癒した時には席がえも済み、Aさんとは遠く離れた席になっていた。

かくして、U子の不登校は一件落着いたのだが、後遺症らしきものとして、授業ではほとんど手を挙げようとしなない、服装や持ち物を徹底して目だたないものにしようとする等の変化があった。

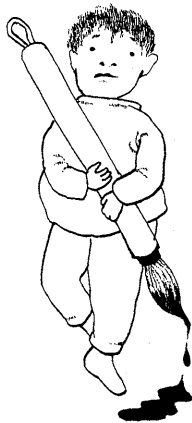
そして、梅雨時のある日、

「Aさんが、傘を持ってむかえにみえたお母さん

と、私を家まで傘にいられておくってくれた」と嬉しそうに教えてくれた。また秋口のある日は、

「帰る時にAさんが、じゃあねって、手をふつてくれたんだよ」と心から嬉しそうな顔。放課後、ともに遊ぶ仲間ができたのもこのころだったろうか。

U子の言葉を借りると、「二十分休みだけでは、仲よしの友だちなんてつくるのはむずかしい。幼稚園や前の学年の組の人と話すぐらいで精一杯だもの」。授業参観でも感じるのだが、子どもたちは個々の作業をする時間が多く、討論や意見交換を通して、級友の人となり、考えを知ることが少なく、なっているように思う。覚えること、身につけること、そのカリキュラムが一杯で、人として互いに育ちあっている集団生活には程遠くなってきているのだからか。それでも、難しさの中で、友達をつくり、心をつなげ、楽しい時を編み出そうとする子どもたちの力を信じたいと思う。



Aの場合（年中組）

Aは、U子と三歳違いの私共の第二子である。

一、二歳代は、人みしりと場所みしりが極めて少なく、迷子になりやすい、母親としては気がかりな成育歴を経ている。三歳近くで、やっと、母から離れがたく、べったりくっつくことが多くなっていたものの、幼稚園最初の年少組では、あちこち好きな所

で時間をすごし、それなりに満足して園での生活をしてきた。

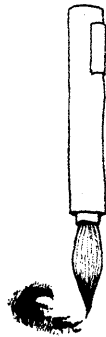
そして、Aも、二年目の年中組の新学期が始まって二週間ぐらいで登園をしぶり始めた。やはり、起床後、腹痛を訴えるのである。便意ではない。気持ちをひきたたせるようにならぬから登園させていたが、起床後、掛け蒲団の上での放尿が二回続いた。一歳代での断乳に前後して夜驚症めいたことが何度あったので、それと似たようなことが、Aの中で起こっているのだろうかとも思った。Aもまた、言葉で表現できない苦しみをかかえているように思われた。担任のN先生からも、Aがトイレでなく「園庭で放尿してしまった」ことをきいた。N先生もAのことでは悩んでおられ、Aの欲求に添わない先生の指示に対して、Aがピントの合わない反応をすることに苦慮しておられた。家庭ですごした三歳までにも、トイレで用を足すこと、食べ物や玩具を投げずてはいけないことを教えるのに長時間を費やし、

やっと、いつのまにか治まったAである。集団生活での諸々の約束事をうけいれることに容易でないことは、想像がつく。おたまじゃくしは足が生えれば尾は自然に消えるが、Aは手足や言葉を自由に使いこなす過程もゆっくりで、自己中心の欲求を満足させたい幼なさは、恐竜の尾さながらに太く長くひきずっているように思えてならない。園庭や掛け蒲団の上での放尿は、自分の気持ちとは違うところで行動しなければならぬことに対する、Aなりの心の状態の表明であるようにうけとれた。

N先生は、Aが製作と折り紙を好むことに着眼され、それらのことを最大限保育にとり入れて、Aを喜ばせて下さった。折り紙や製作がたいへんに上達したのはいうまでもないのだが、Aも少しずつ先生の出される指示に折り合うようになっていく。

まだまだ、自分の興味や関心を満たすことに夢中で、お友だちと関わったり、一緒に遊ぶ場面は少ない。けれど、年長での一年間で、どのように人との

関わりを知り、成長していくのか、楽しみでもある。また、なわとびやボール遊びなど、物の動きに合わせて行動することも嫌うので、人や物に自分を折り合わせていくことへの苦手の傾向が、Aの個性なのか、あるいは興味ある変化をとげていくのか、注目したいところである。



Mの場合（三歳四か月）

第三子のMにとっては、U子、Aの姉兄のいる家庭が集団生活のようなものである。そのMは、一歳半の時から、週一度の割合で、母の仕事の日だけ近所の乳児院で半日を過ごしている。この四月からはAと同じR幼稚園の年少にあがるのだが、入園の準

備などで短時間を幼稚園ですぐすと、

「あーあ、僕もみんなに会いたいなあ」

とつぶやいている。

「みんなって、乳児院の先生やお友だちのこと？」

ときくと

「そう、そう」と言う。母の都合で預けられるというだけでなく、Mも彼の生活の場として、なつかしくなるような温い集団生活をさせてもらったのだと思う。

Mは、乳児のころから自己主張のはっきりした子どもだと思われたが、ことばを話し初めた二歳頃から、私が叱った時、注意を与えた時に必ず、

「お母さんが悪い!!」と言い張る子で、私はつい最近まで驚きあきれ、閉口しつづけてきた。この一年間は、トラブルの半分以上がMをめぐって起こり、U子にしてもAにしても少なからずMの我の強さ handsを焼いていたと思う。ところが最近、Aに怒られたり、許してもらえなかったりすると、さめざめと

涙をこぼして泣いていることがある。納得できない気持ちを攻撃的に表わすことしかできなかったAであるが、受け入れてもらえない悲しさとして内に向け出したのだろうか。はっきりした変化をみせながら成長していく子だと思う。

MもAもU子も、これからどのような変化をとげていくのか、当然のことながら見当はつかない。けれど、今日一日を、心楽しく、納得のいくすごし方ができれば、自ずと明日一日分ぐらいは元気にきり拓いていく力が湧いてくるものではなからうかと思える昨今である。

(はるにれの会)

